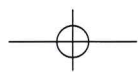
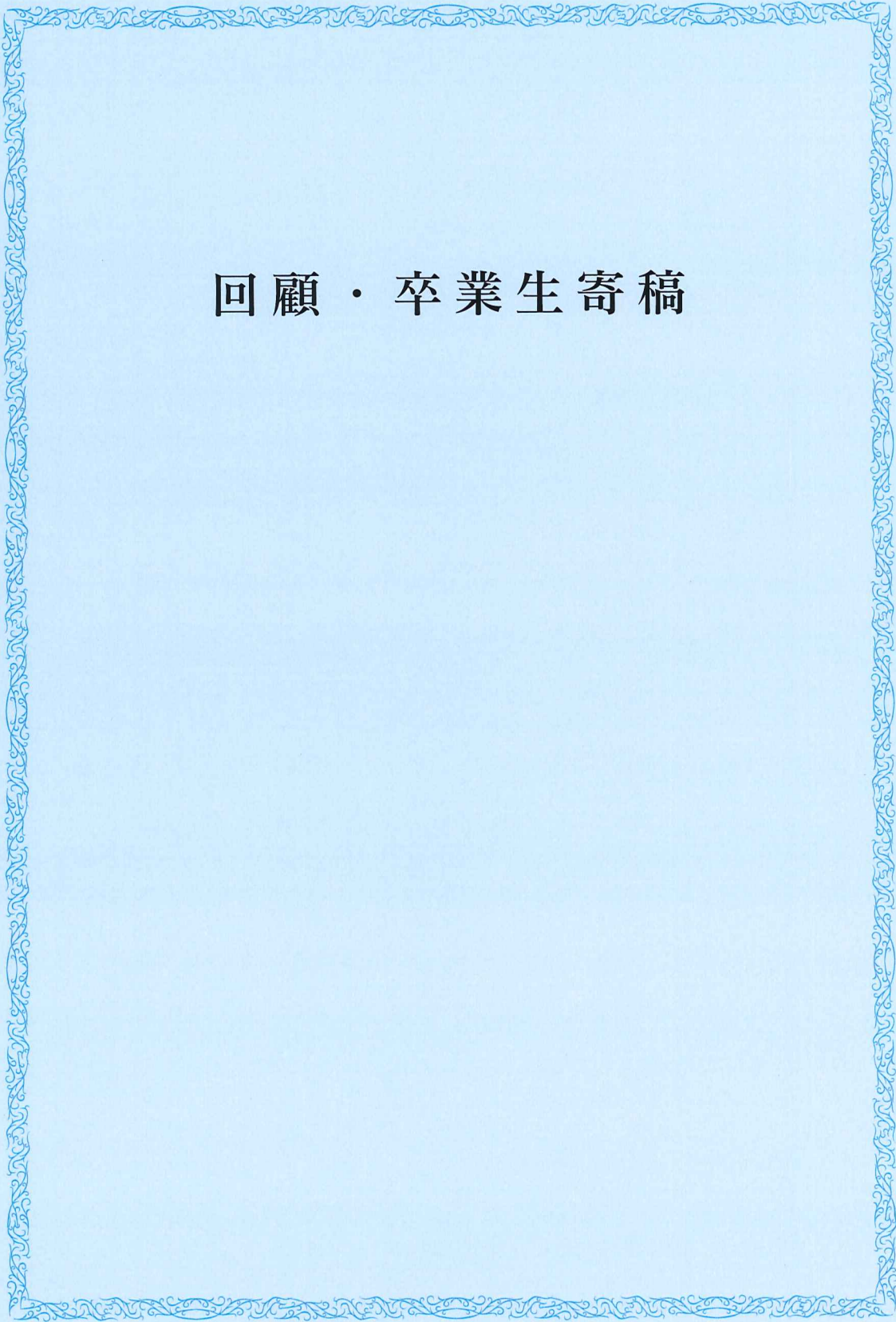


回顧・卒業生寄稿



回顧・卒業生寄稿



寄稿

消防学校 創立50周年に寄せて

元 長崎県消防学校校長
(第19代校長)
戸高 文尊



長崎県消防学校が創立50周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

創立以来今日まで、消防職員並びに消防団員をはじめ広く消防防災に関わる関係者の皆様の教育訓練に心血を注がれ、県内外はもとより時には国外においても活躍される人材を輩出してこられたことは、歴代の校長はじめ教職員並びに関係皆様方のご尽力の賜であり最大の敬意を表するものがあります。

今回、記念誌への寄稿依頼を受け、改めて小生のこれまでを振り返り、長年、消防防災の業務に従事し、その約半分以上の年月を消防学校で過ごせたことを感慨深く、また誇りに思っております。

職を辞した今、当時を思い起こしますと、懐かしいお顔、お言葉、場面が鮮やかに浮かんでまいります。いずれの方も見識高く、仕事に限りない情熱を注がれ、郷土愛と奉仕の精神に満ちた素晴らしい皆様でありました。小生の未熟さゆえの数々の失礼に改めてお詫び申し上げますとともに、皆様の寛容な心により、私の今日があるものと深く感謝いたしております。消防学校は、先ず消防の研修の場ではありますが、小生も人生を通して探さなければならない尊いことを皆様と共に学び、お教えいただきました。

ご承知のとおり、消防をとりまく環境は、ますます困難で厳しい状況にあり、想定という言葉が憚られるくらい未知なる災害に対し、常に不安感と緊張感の中で万全を期す方策を講じなければなりません。

昨年発生した未曾有の東日本大震災をはじめ、相次ぐ自然災害の猛威等どのように困難な状況にあっても消防は常に国民の切実な願いと信頼に応

える責務が課せられています。そして、住民の期待は信頼の証であり、消防関係者の今日迄のたゆみない努力の賜でもあります。この大きな期待を遣り甲斐

と受けとめ、強い使命感と誇りをもっていただきたいと思えます。

また、危険を伴う過酷な状況での任務遂行のため、雲仙・普賢岳噴火災害や東日本大震災においても、多くの消防職員・団員をはじめ関係者の方々が職務に殉ぜられました。身の危険を顧みず事にあたる災害現場において、我と我が心に苛まれる場面が多々ありますが、任務を果たし、同僚を護り、自身を護る、そのために頼れるのは、時に高性能の消防機械器具も考えられるものの、何より、自身を含む「人」であります。職責を自覚し、強い精神と高い知識、優れた技術を身につけた「人」そのものです。

そして、消防の基礎教育にはじまり第一線の実践活動機関までを一つの組織と見た場合、どのような組織にも目立たない仕事があれば、複雑かつ高度なものもあります。しかし、組織を支えるのは、この目立たない仕事の集積であり、担うものは全体の一部であっても重要であるという認識が大切です。本県の消防防災に従事される方々が、第一線で活躍いただくために、消防学校が果たす役割はますます大きくなると、改めて強く感ずるところであります。

結びに、消防をこよなく愛し、その発展にご尽力くださった多くの先人とともに長崎県消防学校並びに長崎県消防の発展と関係皆様方のご活躍を心から願い、見守っていくことを、これからも何よりの楽しみとさせていただき、お祝いの言葉といたします。

回顧・卒業生寄稿

「2つの消防学校」

元 佐世保市消防局長
(派遣期間 S57.4~S59.3)

井上 惇



の廊下から見下ろせば、浦上川が決壊し、下の公園は見る見るうちに冠水し、真正面に見える油木町の道路は、川と化しタクシーが逆走している。

長崎県消防学校創立50周年おめでとうございます。

半世紀にも至る長きの間、数々の消防職員・団員の方々を誘い育てこられた消防学校の関係各位の皆様にあらためまして敬意を表したいと思います。

私は、昭和57年度の長崎市城栄町での最後の消防学校と、昭和58年度の大村市森園町での最初の消防学校の派遣教官として貴重な体験をさせていただきました。

この二年間での貴重な体験を後世に伝えるべく機会を与えていただいた校長先生に感謝を申し上げますとともに、そのいくつかを語らせていただきます。

皆様もご存知だと思いますが、長崎市城栄町の消防学校は校舎も老朽化し、また教室も寮も校庭も狭隘で、訓練塔もなくどちらかという消防学校としてはあまり適していなかったように思えましたが、でも裏には護国神社や学校周辺には商店や飲み屋などの繁華街があり入校学生の職団員さんにはとても素晴らしい環境だったことと思います。

私の最初の大きな体験は、昭和57年7月23日のあの長崎大水害です。確かその日は「九州地区消防救助大会」が長崎市で開催されたその夜でしたか、その日の日課が終わるころ、職員室の大きな窓から見えるはずの校庭が、バケツの水をひっくり返したような雨で一寸先も見えないくらいの土砂降りの雨、「今日の雨はひどかねー」と言って校長先生や教頭先生勿論他の教官も帰られたその後、あの未曾有の水害が発生しました。

夕食を終えたばかりの第27期初任科生は、3階

目の当たりに見る衝撃的な光景に、さすが消防塊をもった学生達は外に飛び出し何かをしなければと血気立つ、しかしながら学生たちは、各消防本部から将来を嘱望された大事な消防の卵たち、ここで、もしものことがあったら申し訳が立たない、その日当直教官だった私は、学生たちの心を沈静化するのがやっとでした。

まだその悪夢の水害から覚めあらんころ、こんどは10年に一度の大行事「長崎県消防学校創立20周年記念式典」の開催でした。当時は今のようにパソコン等もなく、20年間の消防職員・団員のあらゆる課程の卒業名簿を一人ひとりを手書きで作成し、それをまとめて印刷に出す。式典は一日で済みましたが、その準備が今思えば大変だったように記憶しています。それは、当時は週休2日制でなく、だいたい週末には消防団員の現地訓練の要請があって、4名の教官のうち誰か一人の教官が出張していましたし、また現在の大村の消防学校みたいな舎監教官もありませんでしたので、一週間に一度の割りで、時には二度も当直が回ってくることもありました。4名の教官が揃うのは稀だったからです。

その記念式典が終わって間もなくしたころ、次は消防学校の移転の話がありました。当然、移転計画は私が赴任する前からあった話で、私にしてみれば突然の話でしたので少しばかり動揺しました。

移転先は大村市で、その日を境に移転準備にかりました。年内の入校は従来どおりで、年明けの職団員の入校は制限され、着々と移転作業が進められたのです。荷造り作業の毎日、そして長崎と大村を往復する日々が続きました。3月の年度

回顧・卒業生寄稿



寄稿

末を迎え大村の新庁舎への教材の搬入が一段落し、全職員がホッと一息付いたころ、職員室に全職員が集まり、これから新庁舎でのスタートだ、と意気込んだその時、突然の人事異動の発表。いやーあの時は驚きを隠せませんでした。

校長、教頭、それに大村移転を心から喜んでいた専門教官、トップから1. 2. 3の3人の異動。衝撃的でしたねあの時は、長崎市消防局の先輩教官は任期終了でしたので、残った教官は私と戸高教官だけ、新しい大村での消防学校は苦難のスタートを余儀なくされた感でいっぱいでした。

そんな中で昭和58年度長崎県消防学校がはじまり、新しい校長・教頭と長崎市消防局からの派遣教官、そしてその年から県央消防本部からあらたに研修教官が、また、舎監制が採用され2名の当直教官が加わり、爾来30年の歴史を刻む大村市森園町での消防学校が幕をきったのです。

第28期の初任科生入校を筆頭に次から次に入校する消防職・団員。新校舎の落成式や、救急課

程での講師の確保などなどその影には専門教官としてただ一人残った戸高教官の苦労は計り知れないものがあり、現在の大村市森園町の消防学校の継承は戸高教官のご尽力なくして語られません。

広々とした校舎と校庭、それに大空にそびえ立つ白矢の訓練等、運動場も屋内訓練場も完璧なまでに近代的設備が駆使され、前消防学校とは比較にならないほどに環境的にも恵まれた消防学校。こうした中、教官たちは消防の責務を正しく認識し、また、学術技能の習得や体力・気力の錬磨など人格の高揚を図るなど、地域住民の期待に応えるべく消防職員・団員の教育に専念されてこられたのです。

私は、こうした崇高な教官の職を誇りに思い、また、消防職・団員の皆様方の暖かいご厚情に対しこの誌面をお借りして深く感謝を申し上げます。

大村の地に誕生して早30年、長崎県消防学校の今後ますますのご発展と、歴史と伝統を継承すべく職員・教官のご精進とご多幸を心からお祈り申し上げます。

回顧・卒業生寄稿



消防職員第28期初任科 S58.5.25 県防災訓練にて

回顧・卒業生寄稿



**「消防学校教官生活を
顧みて」**
(初任科教育二期制スタートに伴い)

県央地域広域市町村圏組合消防本部
(派遣期間 H17.4~H20.3)

田方 章



長崎県消防学校創立50周年おめでとうございます。

私は、昭和57年に長崎市城栄町での消防学校としては最後の初任科第27期として入校し、護国神社のもとで勉学及び訓練に励みました。(翌昭和58年に消防学校は大村市森園町に移転)

この年は、私達が入校中の7月23日に長崎大水害が発生し、被害が急激に拡大して行く様を直接目にし、災害の恐ろしさというものを鮮明に記憶しています。

さて、私は平成17年4月から3年間消防学校教官として勤務させていただきました。教官生活を顧みますと、最初は講義や訓練等の指導で失敗や後悔の連続で自分自身の未熟さに嘆いていましたが、学校長をはじめ教官や講師の方々、県下消防の仲間のバックアップ、そしてなにより入校生、特に初任科生や消防団員、また一般市民である自衛消防隊の皆様方の知識・技術を習得しようとする情熱や意気込みの後押しされ、何とか無事に任期を全うすることができました。

特に平成19年からは、今後10年間にわたり消防職員が大量に退職されることに対応するため、33年ぶりに消防職員初任科教育を前期・後期の二期制で実施しました。なにぶん33年ぶりということで、過去の資料も無く、また教官達の経験も無い状態の中、前年から準備に取りかかりました。今まで6ヶ月で実施していた教育を5ヶ月に短縮し、初任科教育800時間はクリアしながら、かつ絶対に教育の質を落とさない。更には、4月から翌年3月まで初任科前期・後期、救急科と1年間を通して長期入校課程が有り、同時に消防職員専科、消防団員課程、その他の課程等を併設し

て進行しなければいけません。そのような中、カリキュラムの編成や講師の手配、施設研修場所の確保等々を行いました。

いざ、二期制が始まると濃縮された研修で、学生も教官も時間との闘いです。毎朝、国旗掲揚後の訓練礼式、毎月1回深夜までの夜間訓練、また併設課程との同時進行、学生は毎週(多いときは週2回)の効果測定、課外での学科・実科の予習復習や体力錬成など死にものぐるいで頑張っていました。しかし、そういう姿を見ていた入校中の自衛消防隊の方々が「若い消防士さん達が一生懸命訓練をされているのを見て私達も安心して暮らせます」と言われた言葉が心に深く刻み込まれています。

夏は熱中症、冬はインフルエンザ対策に苦慮しながらも、入校生の方々と共に汗を流し、苦しみ、そして最後はみんなと一緒に笑った消防学校生活でした。特に消防団員の方々は、生業を持ちながら郷土愛護の精神で防災に打ち込まれている姿を見て、教官として身が引き締まる思いでした。

最後になりましたが、長崎県消防学校の今後ますますのご発展と、県・市町の消防関係者及び学友会皆様のご活躍をご祈念申し上げますと共に、お世話になりました方々へ心から感謝とお礼を申し上げます結びとさせていただきます。

回顧・卒業生寄稿



消防学校の思い出



西海市消防団長
井田 邦彦

昭和37年、長崎県消防学校が、長崎市城山町1丁目1番地に設置開校され、そして、昭和58年に、現在大村市森園町663の6に移転、新たなる校舎が落成し、郷土愛にもえる消防団・消防職員の育成教育の機関として、多くの関係者の努力によって実績を積み重ねられ、伝統ある消防学校の石礎を築いて、本年開校50周年の記念すべき年を迎えられたことに対して、敬意を表するとともに、お祝い申し上げます。

長崎県消防学校校訓

- 一、職責を自覚して規律厳正なる行動に徹する
- 一、謹厳実直にして学術技能の修得に邁進する
- 一、和衷協同して消防精神の涵養に努める
- 一、清潔明朗にして、体力の向上に励む

社会の急速な変化発展に伴い、消防環境の変化に対応し得る消防団員、職員を養成し、そして消防の責務を正しく認識させると共に、人格向上、学術技能の習得・体力の練成・規律の保持・協調精神の涵養を図り、もって公正且つ能率的に職務の遂行をし得る事を目的に、消防学校は開校されたと記憶しています。

私は、昭和24年、戦後復興、そして自治体消防発足誕生・中学校卒業と同時に、地域の消防団に入団し、その当時、分団長さんを小頭と呼んでいたことを記憶しています。当時新入団員は先輩団員の小使い役でよく走り回ったものです。訓練があれば機具の点検、整備、当時は腕用ポンプでピカピカになるまで磨き、整備をしたものです。また、一旦火災でも発生となれば消防詰所及び半鐘台へと走り、稼働出来る団員の集合具合を見て、大八車の登載車を引出し、鉦、鎌を持って、今日

のように道路は整備されていない山・坂・谷ありの道を走ったものです。昭和37年、城栄町に開校まもない8月31日、第5回幹部科操法科へ1泊2日の

日程で入学。学校長より消防組織法の講義並びに解説又、林教頭先生には、操法の実践訓練と武田教官には礼式訓練等厳しい中にも充実した指導を賜り、心を新たにしたものであります。それ依頼、17年間消防団在職中は消防学校入校はなく、私は、昭和52年消防団在籍30年分団長を最後に退団したものです。平成2年、再度副団長として入団致しましたが、11年間の空白は大変でありました。社会経済の変化と環境変化、複雑多様な大規模災害の発生、又、消防団員の減少等の中で「自分達の村は、町は自分達で守る。」を合言葉に団員確保を頑張ったものです。本県に於いても諫早大水害、福江市の大火、長崎大水害、そしてあの雲仙普賢岳災害。多くの仲間同志を亡くし、又、大村グループホームやすらぎの里での火災、年々都度発生する水、火災を最小限に食い止め、町民の安全を確保する事が責務である事を痛感致しました。平成23年3月11日、三陸沖大地震ニュースで、陸に押し寄せる津波が丘を超え家、又は車を飲み込み、想像を絶する、まさに身の毛のよ立つ思いが致しました。今尚原発事故による放射能被爆災害終息の気配なく目処もたない状況で、避難生活を余儀なくされておられる方を思う時、我々消防に携わる者の一人として残念に思っています。防災無線で町民に避難を呼び掛け、津波の犠牲になった南三陸町役場の遠藤末希さん（当時24歳）のあの声が身の奥深く胸深く残って居ます。

また、雲仙岳災害での折に、九州大学教授、太田和也講師に依る噴火災害ならびに火砕流についての講義解説も、今尚心の奥に残っています。私は、副団長として9回、又、団長として12回入校

回顧・卒業生寄稿



寄稿

することが出来ました。消防組織法を基本に、災害予防組織管理団員の教育訓練など災害実例等々の指導を受け学び、如何に地域に対応出来るか、私達に与えられた使命と思い、住民の身近な防災機関である事を入校の都度に再認識致しました。

人生は、多くの人と出会い、消防学校の先生方、又多くの講師として出席された方、又団員として桜水寮での寝食を共にした思い出は何事にも勝る絆であり、忘れることの出来ない喜びであります。最後になりましたが、長崎県消防学校のますますの発展を心からお祈り申し上げます。



第5回幹部科(操法科)修了記念

長崎県消防学校 昭和37年8月31日

回顧・卒業生寄稿

寄稿

新校舎救急専科 1期生の思い出

佐世保市消防局
(第11期救急科)

村岡 昭治



長崎県消防学校創立50周年おめでとうございます。

地域防災の防人としてご活躍いただいております、県内の消防職員並びに消防団員の教育訓練施設として創立された消防学校が半世紀を迎える節目に寄稿する機会を得ましたことに感謝申し上げます。

振り返れば、昭和57年に長崎市城栄町から現在の大村市森園町に移転新築した消防学校の第1期の救急専科1課程(第11期救急科)に10月末から1ヶ月間入校することになりました。真新しい校舎や訓練塔、広い運動場、専用の寄宿舎など長崎市の旧消防学校とは格段の差を感じたのを記憶しております。

入校した学生は、県下全域の消防本部の中堅から新人までが集い、昼は真剣に講師の話に耳を傾け、夜は体力錬成や各部屋での談話に花を咲かせておりました。学生は知識習得と懇親を深めるだけでよかったのですが、学校教官は大村に移転して初めての救急専科のため、医師や看護師などの講師の手配など学校運営も大変苦労していたように感じられました。

何事も初めが肝心であります。学生も大村の街は初めての人がほとんどで、県央消防本部の職員の情報に頼りに大村の街を如何に開拓するか教官以上に苦労しておりました。その甲斐あってか県下消防職員の意見交換が財産になっていることも忘れられません。時には度を越した行動をしたことで非常呼集や団体責任を取らされたことも、今では貴重な体験であり、古き良き時代の思い出でもあります。

私は当時、出張所に勤務をしていましたが、そ

の地域は道路事情も悪く、医療過疎地域でありましたので、出勤から病院到着までの平均1時間、長いときは2時間を経過することもありました。医療過疎

地域での救急隊員の果たす役割は大変なもので、患者はともかく付添いの人や救急隊員の車酔いまで介抱するすることもしばしばありました。

このような地域状況や長時間搬送の中で、消防隊と救急隊の兼務職員とは言え、白衣を着て救急隊員として出勤している以上、傷病者の観察や対応など適切な処置を行うことが、傷病者やその家族に安心感を与えることになり、それが救急隊員に課せられた責務だと思っておりましたので、救急専科に入校する機会を得たことで、医療知識を教わり症状にあった応急処置などの救急に関する知識を専門の医師や看護師などの講師の皆様方から習得することができたことは、大変意義ある専科入校であったと思っております。

現在は指令課に勤務しておりますが、医療現場は当時とは比較にならないほど進歩し、救急救命士の導入など救急隊員の知識も向上している中で、錆びついた知識とはいえ119番対応や病院交渉、現場の救急隊員とそれなりの無線交信や会話ができることは、あの時の基礎知識が無駄ではなかったと感謝しております。

救急需要の増加、想定外の自然災害や特殊災害の発生など、時代の流れとともに消防に対する市民の期待は大きくなる一方で、消防の責務は重大になってきております。

消防学校は、これらの各種災害に対応する消防職員・消防団員の育成には欠かすことのできない教育機関でありますので、これからも時代に即した消防教育と県下消防職員の親睦の場としての長崎県消防学校の更なる発展をお祈り申し上げます。

回顧・卒業生寄稿



寄稿

初任科教育を顧みて

島原地域広域市町村圏組合消防本部
(第62期初任科卒業生)

本間 聡志



た教官方には本当に心から感謝の気持ちでいっぱいです。

長崎県消防学校が創立50周年を迎えられましたことに心からお慶び申し上げます。

この記念すべき節目の年に初任科生として入校し、記念誌へ寄稿できることを大変光栄に感じています。

初任科生として過ごした5ヶ月間は私のこれまでの人生の中でも非常に貴重で有意義なものであり、なにより消防職員としての基礎を学ぶ印象の深いものでした。

平成24年4月5日、着慣れない制服を着た自分の姿に緊張と責任を感じた入校式。学生長に任命され、決意を込めて宣誓書を読んだことを今でも鮮明に覚えています。

そして始まった初任科教育は年齢差のある環境での集団生活であると共に、厳正な規律が求められ、それまでの生活と全く異なる環境で不安と緊張が続きました。また、5ヶ月間の教育内容は非常に多くの学科や訓練があり、身が引き締まる思いでした。

学校での生活は一日一日がとても内容が充実したものでした。その中で、自分自身では一生懸命に日々の教育や訓練に取り組んでいるつもりでしたが、時には気持ちが緩んだり、妥協しそうなこともありました。そのような時に最も刺激となったのは、学校教官の方々の姿です。どんな時でも私達に対し、模範的な姿勢で接して下さり、何事にも全力で教育して下さい



また、学校長をはじめ、学校職員の方々は私達が万全の状態に臨めるよう、見えないところでサポートして下さい、本当に感謝しています。

また、初任科研修の中で、科目とは別に非常に貴重なものを学ぶことができました。それは、第62期初任科生46名の同期の絆です。苦しいことも楽しいことも共に分かち合った仲間と過ごした日々は私にとってかけがえのない思い出です。

同じ志を持つ仲間と教育や訓練を乗り越え、少しずつ団結が強くなる事を感じていました。これは組織人としての自覚を養うために、とても大事な事だと思いました。

組織がその能力を発揮するためには、まず個人間の強い団結が必要となり、団結のもとに規律が保持され、団結心と規律心を持ち職務に臨むことで士気が高まり、高い士気により組織の能力が発揮されると学んだことがあります。私は、消防という組織はまさしく同じであると思います。そして、これらの気持ちを教えてくれた消防学校に感謝しています。

私は現在、初任科を卒業して所属にて勤務をしています。消防学校とはまた異なる環境で、毎日

が勉強の日々です。この中で、消防学校で学んだ事を生かし、日々の勤務に励みたいと思います。

長くなりましたが、最後まで読んでいただき、ありがとうございました。



1人の消防士として

吉崎市消防本部
(第60期初任科卒業生)

下條 遙



長崎県消防学校創立50周年誠におめでとうございます。平成23年4月に消防士を拝命されて以来、第60期初任科課程、第15期救急科課程、第4期予防査察科課程と、3度消防学校に入校させて頂きました。どの課程も、教官や講師の方々から熱心に指導をして頂き、幅広い知識や技術を習得することができ、充実した消防学校生活を送ることができました。

私が男性ばかりの消防の世界に足を踏み入れた際、多くの不安がありました。それは、体格も全く異なる男性と一緒に勤務をして、通用するのかということ。また、私の所属する吉崎市消防本部は男性ばかりの職場であるため、体力面はもちろんのこと、精神面において乗り越えていけるのかということでした。日本全国には、多くの女性消防吏員の方がおられるため、努力し精一杯やれば、どのような困難も乗り越えていけるとは思いましたが、いざ、消防学校に入校してみると、周囲には私とは全く体格の異なる男性ばかりで、不安が増していきました。その時、教官から「今まで11人の女性消防吏員が入校したが、全員何事にも一生懸命取り組み、元気に卒業して行ったぞ。」という話を聞きました。それまでは不安でたまらず、ネガティブな考えばかりが頭をよぎっていましたが、この話を聞いて、同じ女性である私にもできないはずはない。どのようなことがあっても最後まで諦めず一生懸命頑張ろうと決めました。

消防学校に入校して約1週間後に救助訓練が行われました。予想以上に過酷な訓練で、足を引っ張ってばかりの3日間でした。しかし、会って1週間の見ず知らずの私を見捨てず、励ましてくれる同期の仲間がいました。この救助訓練に限らず、

30キロメートルマラソンや山岳訓練等の様々な訓練において、何をすることも私の周りには、「頑張れ、もう少しだ。」と励まし、時には優しさのこもった檄を飛ばしてくれる同期の仲間や教官方がいました。その時に止めていれば苦しい思いをすることもなく、楽に過ごせていたはずですが、その時に諦めず、最後まで一生懸命頑張ることができたのも、励まし、時には檄を飛ばしてくれた同期の仲間や教官方のおかげだと思っています。本当に感謝しています。

現在は、本部予防係兼隊員として、予防業務及び災害現場へ出動しています。予防業務は今年で2年目になり、先輩方から多くのことを学びながら少しずつではありますが慣れてきています。しかし、消防同意や危険物施設の審査等の幅広い業務に、辞書や参考書を開きながら悪戦苦闘する毎日です。また、隊員として主に救急現場へ出動していますが、出動の度に帰りの車内では、現場活動を振り返り反省する日々が続いています。まだまだ先輩方には迷惑をかけており、自分の甘さや未熟さを痛感しています。

今後は、市民から信頼される消防吏員になれるよう、幅広い知識や技術を身につけていきたいと思っています。そのためには、まだ若いから、女性だからという甘い考えは許されません。市民にとっては若くても、女性でも1人の消防士です。女性だからこそ、精神面、身体面とも男性に負けないよう鍛え、『全ては市民のために』をモットーに、日々精進していききたいと思います。

回顧・卒業生寄稿



寄稿

女性消防団員として



大村市女性消防団
谷本 ななえ

「今の私に何ができるのか!」

こんな私でも人の役に立て、地域に貢献できることがあるのではないかと日々考え、自分ができる範囲のボランティアから始める事にしました。そういうなか知人から女性消防団活動がある事を教わり迷いなく入団する事にしました。その後、女性消防団員研修課程の一日入校がありました。その研修では、学ぶ事全てが私にとって新鮮で興味深い事ばかりでした。これまでまた一歩地域の為に活動できる知識を身につけることができたことに嬉しく思う反面、女性消防団員としての意識と責任を強く感じた瞬間でもありました。

現在、女性消防団活動として「防火週間の広報」「一人暮らし高齢者宅訪問」「応急手当の普及員」「ポンプ操法訓練」などさまざまな活動を行っております。また新たな活動として幼稚園や保育所などを対象に、紙芝居やクイズを通じて火事の怖さや地震の恐ろしさなど分かりやすく楽しんで学んでもらえるよう作成中です。この活動により一人でも多くの方に避難訓練の大切さを知って頂ければ幸いです。

話が変わりますが私にはもうひとつ消防学校と



の関わりがあります。消防職員初任科生訓練課程で日本赤十字水上安全講習があり、その講師として毎年伺っています。水上安全法とは「水に関

わる活動中の安全を図る方法」水の有効性と危険性を周知し、水の事故を防ぐとともに積極的に水を活用して健康を増進し、万一事故が発生した場合には、その場所や状況に応じて的確な対応が図れるようにする事をいいます。三日間という短い期間で水難救助の基礎を学ばなければなりません。厳しいプールでの訓練ではありますが、消防職員初任科生一人一人の救助への熱意や意識の高さなど真剣に取り組む姿を見ると指導者としてというよりも、同じ想いを持つ者として身の引き締まる思いになり、より一層気合いが入ります。



また、指導者という立場ではありませんが逆に学ばせて頂く事も多々あります。その中でも特に感銘を受けた事は、校長先生をはじめ、教官・消防学校関係者全ての人達の丁寧な対応と心遣いです。

私の様な若輩者にも気持ちのこもった挨拶をして頂けます。これからも微力ではありますが、消防学校の為に力になれるよう、もっと自分を磨き生徒に負けない熱意を持ち初心を忘れる事なく指導に邁進して行きたいと思っております。

最後になりましたが、創立50周年のお祝いを申し上げますと共に、消防学校のますますの発展と皆様のご活躍を心から祈念いたします。